

漁によるカムリウミスズメの混獲は防げるか？

枇榔島調査研究会：中村豊



【はじめに】

多くが北方に分布するウミスズメ類の中でカムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* は例外的に暖帯海域である西南日本沿岸と韓国沿岸の島嶼で集団繁殖する小型の海鳥である。総個体数は約 10,000 羽と推定され、国指定の天然記念物、日本の RL、IUCN Red List の

VU 指定を受けている。個体数減少の要因として、人が持ち込んだネズミによる卵やヒナ、親鳥の食害、カラスによる親鳥の捕食、延縄漁や刺し網での混獲が挙げられる。

【調査地】

本種の繁殖地である宮崎県東臼杵郡門川町枇榔島で、門川町の沖合約 7 km の太平洋上に浮かぶ周囲 1.5 km ほどの無人島である。

【目的】

本種は一年のほとんどを洋上で過ごし、繁殖期に営巣・抱卵のために上陸する以外は、繁殖地から離れた海域を含む広い範囲を利用している。国内でも限られた島嶼でしか繁殖が確認されておらず、生息基盤は脆弱であると考えられる。これまで繁殖地や周辺海域において現況調査などを行い、2012 年からのジオロケー



ターを使った研究で、繁殖地である枇榔島を出て 1 年後に枇榔島に帰って来ること、非繁殖期における移動コースはまちまちであることなどが判った。しかしその移動パターンは、日本を 1 周して帰ってくる個体、太平洋で非繁殖期を過ごす個体、また日本海で過ごす個体など様々であった。また同一個体でも同様の事が示唆されている。しかし、繁殖期の利用海域と採食生態に関することは不明のままである。繁殖期における行動パターンと移動経路や利用海域、利用時期を明らかにすることができれば、混獲を含む洋上での死亡リスクを低減する取り組みにつながる可能性があると考えられる。そこでこれらの事を調査するには、

リアルタイムで本種の行動を追跡できれば最善であるが、体重 160 g の本種に付けられる GPS 発信機はまだない。そこで今回リアルタイムで情報の回収はできないが、2 g ほどのピンポイント GPS ロガーを付けることで、本種の行動を数 m の精度で追跡でき、漁場と餌場の関係を明らかにできると思われる。

【調査方法】

本種は抱卵交代のため、夜間は繁殖地の周辺海域に集まり、島に飛来して上陸あるいは海上へ移動する。そこで、おもに日没後から夜明けまでの時間帯に、捕獲を行い、捕獲後は、環境省足環の確認・装着、体重、翼長、尾長、跗蹠長等、必要な部位の測定を行い、GPS ロガーを装着して速やかに放鳥する。本種の帰巢性は非常に強いこと



ロガーを装着して巣の近くに帰ってきたカンムリウミスズメ

が今までの標識調査で判っているから、GPS ロガーを装着してもかなりの確率で再捕獲されるものと期待している。しかし、GPS ロガーは数万円と高価で、任意団体の予算では全く購入できないため、自己資金を捻出し、来年度の繁殖期に装着する GPS ロガーを 1 個だけ購入したが、1 個のロガーだけでは再捕獲に失敗したり、カラスなどの天敵に捕食された場合など、何もデータが得られない状況が発生するので、数個のロガーを装着することは必須である。

【期待されること】本種の基礎生態解明と保全活動に必要なにも関わらず未だ欠落しているのが、利用海域の解明に関する情報である。本種が繁殖期にどのような海域でどんな餌を利用しているのかは全く分かっていない。

- ・繁殖期間中の餌場は何処なのか。
- ・繁殖地からどこまで離れて採餌しているのか。
- ・抱卵交代は数日間隔といわれているが、本当にそうなのか。
- ・非抱卵個体はずっと海上で過ごしているのか。
- ・さらに一番大事な漁場と本種の餌場との関連はどうなっているのか。

などの情報が得られる可能性は期待される。

GPS ロガーを装着できれば、未知である本種の採食生態の一端を知ることができるだけでなく、繁殖島でのモニタリングで得られたデータの解釈、漁業との関係、本種の繁殖に必要な海洋条件の推定と潜在的繁殖適地の特定といった多様な課題への発展に繋がる。また得られた知見は地元小学生をはじめとする町民にも還元される。